

「本の綴じ形態を知り、コンサベーション・バインディングを試作する」

株式会社資料保存器材

〈コンサベーション・バインディングとは〉

1966年のフローレンスでの洪水の際、膨大な数の書籍が甚大な被害を受けた中で、リンプ・ベラム装丁のものの損傷が比較的少なかったことをきっかけに、イギリスの修復家クリストファー・クラークソンが考案したコンサベーション・バインディングという修理製本方法。表紙と本体の接合をはじめ、綴じ方や本体の背のこしらえなど、極めて本に負荷が少なく、可逆性のある構造のリンプ・ヴェラム装丁が基礎となっている。リンプ・ヴェラム装丁の構造を知ることで、このほかの様々な形態の書籍の特徴の違いや、さらには歴史、損傷傾向などを比較することができる。



〈書籍の綴じ形態の種類〉

■□リンプ・ヴェラム装丁 (limp vellum binding)

綴じ：糸でかがり綴じ

表紙と本体の接合：綴じの支持体（白なめし革）を表紙（vellum）に設けた穴に通す。接着剤は使っていない。



■□版元製本、タイトバックの革装丁

綴じ：糸でかがり綴じ

表紙と本体の接合：表紙と背表紙が一続きの表装材で本体を接着し、本体の背と背表紙が貼り付いている。背表紙やヒンジ部への負担が大きい。



版元製本



タイトバック装丁

■□平綴じ簿冊

綴じ：平綴じ

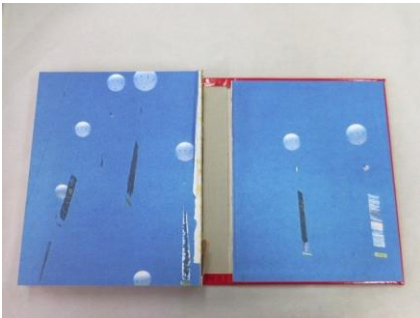
表紙と本体の接合：厚みや大きさに関係なく、表紙と本体を一括で糸で綴じるため、見開きが悪い。



■□接着剤製本（無線綴じ）、図書館製本、くるみ製本

綴じ：本体の背に切り込みを入れて合成接着剤を塗布した綴じや、ぶっこ抜き、機械による糸綴じ、かがり綴じ。

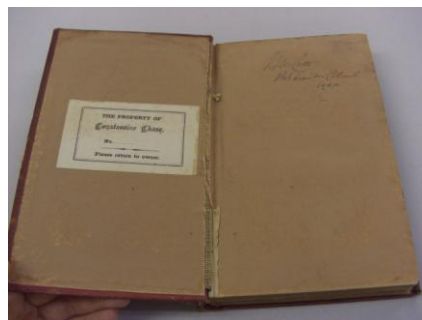
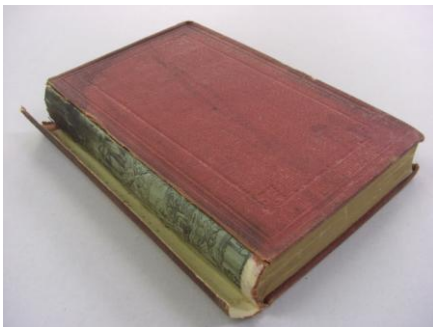
表紙と本体の接合：数枚の背貼り紙の両端を見返しに貼って接合。大きさや重さに対し接合の強度が十分でない。



接着剤綴じ製本



図書館製本



くるみ製本

